鴉の知らせ

しろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鴉の知らせ

【Ｎコード】
Ｎ３１０３Ａ

【作者名】
しろう

【あらすじ】
マンション浴荘に住む男の子『みゃあ』の視点で、マンションで暮らす住人達と仲良く、遊ぶ『みゃあ』。今日は、どこに、いくのかな……？

ボクは、『みゃあ』。
マンション・浴荘のみゃあ。
本当の名前は、『みゃあ』じゃないんだけど、今は、こう呼んで欲しいんだ。
だって、かっこいいでしょ？
それで、何の用かって？
あのね、今日は、ボクの住んでる、マンションのお友達を紹介するね。

《その１・１０４号室のたぁくん》
「やぁ、みゃあ」
たぁくんは、眼鏡をかけた３６歳。
どこかの大学の教授なんだって。
物知りだけど、奥さんは、いないんだ。ちょっと心配。
「うん。今日も綺麗だね」
たぁくんは、いつもそう言って、ボクの頭をなでるんだ。
気持ちがいいけど、口では言ってやらないんだ。
だって、男の子のみゃあに『綺麗』だなんて、失礼だよ。
ボクは、『かっこいい』んだ。
でもね、なでなでされると、つい目を細めちゃうから、たぁくんには、お見通しなんだ。
やんなっちゃうよね。
「おや、ご機嫌ナナメだね。そうだ、昨日大学でね――――」また始まった。
たぁくんの、物知り講座。
これって、意味が分からない上に、長いんだ。

ボク、いつもアクビを抑えられないんだよ。
だからね、途中で逃げちゃうんだ。
だって、いちいち聞いてると日が暮れちゃうよ。
仕方ないよね。

《その２・３０１号室のかなちゃん》

かなちゃんは、たぁくんよりも若いんだ。
何歳かは、知らない。
女の人の年齢は、聞いちゃいけないんだって。
「はい、みゃあ」かなちゃんは、ボクが行くと、いつも、ミルクをくれるんだ。
ボク好みのあったかいやつをね。
やっぱり、ミルクはホットに限るよ。
「私のかわりに、たくさん飲んでね」
かなちゃんは、牛乳が大嫌いなんだって。
それなのに、ボクのために、わざわざホットミルクを用意してくれるんだ。
優しいよね。
「今日の拓海さんは、どうだった？」
こんなにも、若くて、いい人なのに、なぜか、１０４号室のたぁくんの事が好きなんだよ。
変なの。

《２０９号室のみっちー》
「あら、みゃあ。口のまわりが、白くなってるわよ」
そう言って、手を振ってくるのは、みっちー。
女の人なのに、大きくて、体が固くて、かなちゃんと比べたら、声

が野太いんだ。
「さぁ、おいで。お姉さんがふきふきしてあげますからねぇ」
い、痛いよ、みっちー。
「うふふ。かわいい」
実は、みっちーも、たぁくんの事が好きなんだ。
これって、三角関係って、言うんだよね。
でも、ボク最近気になる事があるんだけど、みっちーとたぁくんの匂いって、なんか似てるんだよね。
それに、みっちーの部屋の表札が、滝川光博になってるんだけど、誰か他にすんでるのかな。

《その3・106号室のひーおばぁちゃん》
「あらあら、宮。いらっしゃい」
ひーおばぁちゃんは、ボクのことを『みゃあ』って呼んでくれないんだ。
本当の名前で呼ぶんだよ。
でも、ボクは、怒ったりしないよ。
ひーおばぁちゃんは、お年寄りだし、何しろボクは、大人なんだから。
「よしよし」
ひーおばぁちゃんは、ボクのおばぁちゃんじゃないけど、ボクの事を本当の孫みたいに可愛がってくれるんだ。
だからね、ボクも、ひーおばぁちゃんの事が、大好きなんだ。
ちなみに、ひーおばぁちゃんの本当の名前は、『ひさこ』って言うんだよ。「可愛いねぇ、宮は」
ひーおばぁちゃんになでなでされて、ひーおばぁちゃん宅のこたつに入ったら、ボクは、もうダメなんだ。
ほにゃほにゃってなって、すぐに寝ちゃうんだよ。

「眠いのかい？」
うーん……。
もう、ボク、ダメ……。

《その５・マンション・浴荘のボクの家》

カァ
カァ

うーん、鴉君ダメだよ。
ボクもう、そんなに食べれないよ……ムニャムニャ……。

「――――、みーや。宮ちゃん」
うん……？
ひーおばぁちゃん……？
「もう、夕方ですよ。そろそろ家に帰らないと」
ん……うん？
あれ？
ご馳走は？
「お鴉さんも、迎えに来てますよ」
あれ……。
ボク、すっかり寝ちゃってた？
うーん。
やっぱりひーおばぁちゃんの魔法には、かなわないなぁ。

ちりん

ボクお気に入りの鈴を鳴らして、のびをする。
「また、いらっしゃい」
うん。
また来るね、ひーおばぁちゃん。
その時は、ボクの事、『みゃあ』って呼んでね。

カァ
カァ

真っ赤な夕日をみあげて、お友達の鴉君と、お家に帰ろう。ボクとおそろいの鴉君の真っ黒な体は、ピカピカ光ってとっても綺麗。

ちりん

マンション浴荘のボクのお家は、とっても素敵だったでしょ？
もっと、たくさんお友達は、いるんだけど、ボク、お腹がすいちゃったから、今日は、おしまい。

また、ボクと、遊ぼうね。

おしまい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3103a/

鴉の知らせ

2010年10月28日04時46分発行